北翔大学教育文化学部研究紀要第９号
Bulletin of Hokusho University
School of education and culture department No.9

令和６年１月
2024 January

若者の恋愛・結婚に関する意識調査から考える これからの健康教育について

The Future of Health Education Based on a Survey of Young People's Attitudes toward Love and Marriage

丸　岡　里　香[*1]
MARUOKA　Rika

Ⅰ　緒言

１．少子化とこれまでの健康教育

少子高齢化が進むわが国では，様々な少子化対策が打ち出されているが，これからの未来を担うと期待される若者は，自分の将来についてポジティブなイメージを持ちながら成長しているのだろうか。令和２年に閣議決定された日本の新たな「少子化社会対策大綱」によると，主な施策は【結婚支援】【妊娠・出産支援】【仕事と子育ての両立】【地域・社会による子育ての両立】【経済的支援】であり，支援と教育との具体的なつながりは挙げられていない。しかし，妊娠，出産，子育て世代になってからの働きかけでは手当が遅く，これから出産，育児を検討する年代への働きかけこそが少子化に歯止めをかける効果が期待できると考える。

少子化対策は2019年に取りまとめられた「第４次少子化社会対策大綱」によって進められてきたにもかかわらず，依然として個々人の結婚や子どもについての希望がかなえられていない状況が続いている。加えて2020年からのCovid-19の感染拡大が人々の行動に与えた影響は大きく，2022年度の日本の出生数は前年を５％下回る80万人以下と過去最低となり少子化対策への取り組みも足踏み状態にある。

多くの高校生は妊娠，出産，子育てというライフイベントをこれから経験する。こうした高校生を含む若者への取り組みは「ライフステージの各段階における施策の方向性」の中で「結婚前」の「ライフプランニング支援」として将来のライフイベントについて考える機会を，学校，家庭，地域，企業等の様々な場で提供するとされていることから，生活時間の多くを占める学校の役割は大きいと考えている。

筆者はこれまで若者がライフイメージを具体的に描くためには，ヘルスリテラシーを高めるための健康教育が必要と考え北海道内の地域の保健所や高校からの要請を受けて外部講師の立場で特別講義による健康教育を実施してきた。特別講義の実施前には対象生徒の現状についてアンケート調査を行ってきたことから，高校生の調査と大学生の調査を比較した10代から20代

＊1　北翔大学教育文化学部

への変化についての検討[1]や若者の月経や妊娠，出産に関するヘルスリテラシーや結婚や妊娠を希望するまたはしない理由を調査し健康教育に必要とされる内容を検討[2]してきた。その結果，結婚や子どもを持つことに対しては高校生から大学生にかけて積極性が高くなる一方で高校生も大学生も男子のリプロダクティブヘルスに関するリテラシーが低いことがわかった。しかし，決して女子のヘルスリテラシーも高いといえる結果ではなく，月経の知識が初経の対処に偏っていることや，高校生も大学生も男女共に２～３割が妊娠・出産の生物学的限界の知識がないことが明らかになり，思春期に関する教育のみならず長い人生の多くの時間を過ごす更年期，老年期をふくめたヘルスリテラシーを高める必要を改めて確認することとなった。

２．健康教育の課題

また，筆者も含めて従来の高校生への健康教育は予期しない妊娠や性感染症など健康問題や社会問題への予防教育として実施されていたが，未来を担う若者のヘルスリテラシーを高める教育としては十分とは言えなかった。すでに問題化されていることへの予防教育では児童生徒のレデイネスの幅は大きく，また個々の背景に配慮した内容となることから制約も多く，知識や判断を今必要としている該当生徒に必要な事が伝えられていないのではないかという懸念を抱えていた。現在の日本の学校教育における学習指導要領では，小学４年生では初経や精通について学習しているが，５年生の理科では「受精に至る過程は取り扱わない」とされ，さらに中学１年生の保健体育では「妊娠の経過は取り扱わない」といういわゆる「歯止め規定」が設けられている。こうした教育を受けて高校生になったときには性感染症の予防としてコンドームの有効性と性的接触を避けることを教えることになっているが，「性交」ではなく「性的接触」という言葉を使用するように「歯止め規定」がかかっている。茂木[3]は子どもが大人になる過程において性的自立を促し性的人権を保障するために性教育が必要だという理念に基づいて学習指導要領にとらわれず子どもの現実から授業を作り充実した性教育を構築することは可能であるとしているが，日本の現状は追いついていない。永田[4]は第８回青少年の性行動全国調査の中で今後の性教育の課題として学習内容が男女で異なることと学習内容の定着が低いことを挙げており，性教育を学外の専門家やピアエデュケータに頼るばかりではなく教員研修を充実させることの必要性を述べている。こうした課題に対してすべての生徒を対象とした「成長発達の大切さ」や「自分の心身をどのように大切にするのか」を段階的に学ぶためにプレコンセプションケアを導入することがヘルスプロモーションとして必要ではないかと考える。本調査は2015年，2016年の調査に続けて2017年，2018年に４回実施している。同時期の2017年にはUNESCOによる国際セクシャリティガイダンスが翻訳され，2019年には第８回青少年の性行動全国調査報告があり，同じく2019年には国立育成医療研究センタープレコンセプションケアセンターと厚生労働省科学研究費補助金（女性の健康の包括的支援政策研究事業）「保健・医療・教育機関・産業等における女性の健康支援のための研究」研究班による「プレコンセプションケアを考える会」が開催される等，日本の健康教育にも変化の兆しが見えてきている。

土川ら[5]は助産師の養成課程において早期からプレコンセプショナルヘルス・ケアの概念をとりいれ，助産師課程の学生が高校生を対象とした健康教育プログラムを実践する効果を検証している。受講した高校生にセルフケア行動の必要性と自分を大切にする行動について伝わったことと，助産師課程の学生自身がプレコンセプショナルヘルス・ケアを理解し健康教育を実践する力が習得できたことが示唆されている。また古川ら[6]は高校生を対象に高等学校教諭と助産師が連携してプレコンセプションケアの実践を行った結果，受講前後の健康に関する質問の中で「男性も女性も痩せている方が健康的である」「妊婦の痩せは生まれてくる赤ちゃんの健康に影響を及ぼす」「妊娠中に葉酸の摂取が不足すると胎児に影響が出ることがある」「１週間のうち150分程度の運動では健康維持に不十分である」「「将来子どもを持つか持たないかを高校生のうちから考えるのは早すぎる」「将来の妊娠に備えて健康の備えをすることをプレコンセプションケアという」の項目は10ポイント以上正答率が上がっている。その結果次世代を担う若者にはプレコンセプションの視点からの健康教育が10代の高校生が自らの健康を振り返り，実践できるために必要であると述べている。しかし，これらの実践はまだ先駆的なものであり実践例も少ない。今後高校生を対象としたこうしたヘルスリテラシーを学校教育の中で効果的に取り入れるために，今回は学年による段階的な変化も明らかにし，今後の健康教育のニーズを検討することを目的とする。

Ⅱ　研究目的

本研究では若者が高校生時に，結婚や妊娠・出産にどのような認識をもち成長しているかについて明らかにし，今後の健康教育のニーズを検討する。

Ⅲ　研究方法

１．調査対象

北海道内の公立高校３校の１年生から３年生

２．調査期間

2017年５月～2019年10月

３．調査内容

１）自分と周囲に関する項目　５項目

２）恋愛，結婚に関する項目　４項目

＊本調査は日本性教育協会による調査を参考にしている。筆者は2016年，2017年の調査では第７回「若者の性」白書を参考にしており，その後の第８回調査で大学生に

のみ恋愛の対象を質問する項目が増やされているが本調査でも2016年の調査と比較する事と高校生に恋愛対象を確認していないことから異性と想定して質問しており，同性愛者の恋愛の回答は得られていない。

3）月経，妊娠に関する項目　4項目

4）子どもを持つことに関する項目　2項目

5）性への興味関心に関する項目　2項目

4．倫理的配慮

北海道内の振興局保健環境部保健行政室と管内の教育機関で組織される「保健所思春期ネットワーク研修会」から依頼を受けた保健講話と高等学校からの依頼による特別活動の時間の特別講義において，事前に内容の検討の為に保健師や養護教諭を通して実施校に許可を得て無記名自記式質問紙によるアンケート調査を実施していただいた。個人名は入力せずデータは記号で入力した。

5．分析方法

統計ソフトExcelにて集計し，エクセル統計にて統計処理を行った。χ二乗検定の有意確率5％としたが，母数の少ない回答については単純集計の比較とした。

Ⅳ　結果と考察

1．対象者

アンケート全体の回答者318名のうち有効回答者300名を分析の対象とした。内訳は図1の対象者に示すとおり，男子121名，女子179名，1年生225名，2年生37名，3年生38名であった。1年生を対象とした実施校があったため1年生の割合が多くなった。

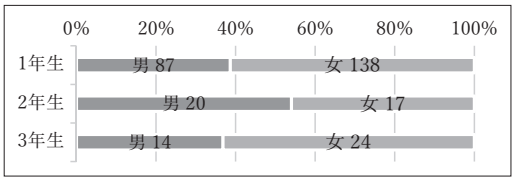

図1．対象者（n＝300）

2．交際について

1）異性との交際の経験について

異性との交際経験の有無について聞いたところ，全体では65.3％が経験があると答えている。男女別では男子65.3％，女子65.4％と差はみられなかった。これは同時期に行われた全国調査と同様であったが，学年別では学年が上がると増加し，3年生では男女とも70

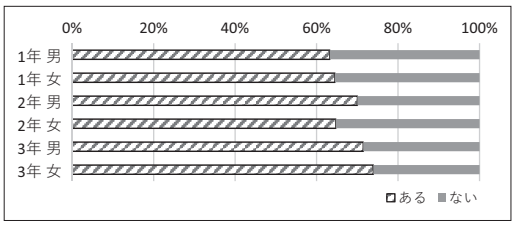

図3．交際経験（n＝300）

%以上であった。これまでの調査では女子の交際経験が男子よりも高いことが続いていたが，第８回青少年の性行動全国調査報告にもみられるように，男女の差は小さくなってきている。同報告では女子の性的関心の低下，性に対する否定的イメージの増加が挙げられており性行動の不活発化につながっているとされている。その理由として性的コミュニケーションの困難があり性に対する関心を失っていることが現れていると言っている。また，ここでは「異性との交際」について質問しており性的指向の多様性については回答に現れない質問となっている。第８回「若者の性」白書では恋愛の対象が異性ではないと答えた男子は4.7%，女子は11.3%であり，今後は高校生を対象とした質問でも多様な指向を持つ生徒が回答できる質問にする必要がある。

２）異性との交際についての意識

交際について面倒なことだと思うかを聞いたところ，全体で「とても思う」と「少し思う」を合わせると48.0%であり，男女では男子40.0%，女子54.4%であるが「全く思わない」は男子27%，女子９%であることから有意な差がみられている（P＝0.01）。交際に関する負担が女子に多く表れており，学年別でも女子は学年が上がると「とても思う」も増加し，「少し思う」を合わせると学年別，男女別の中で一番多くなっている。

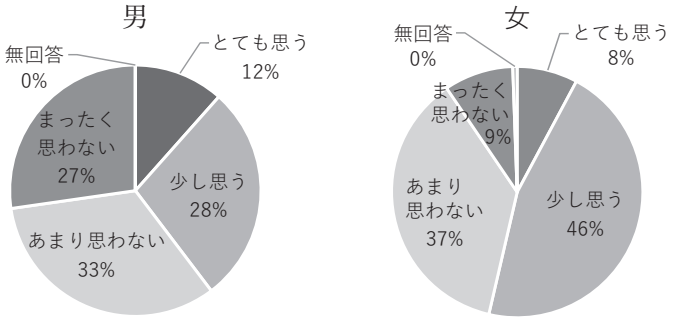

図４．異性や恋愛が面倒なことだと思いますか

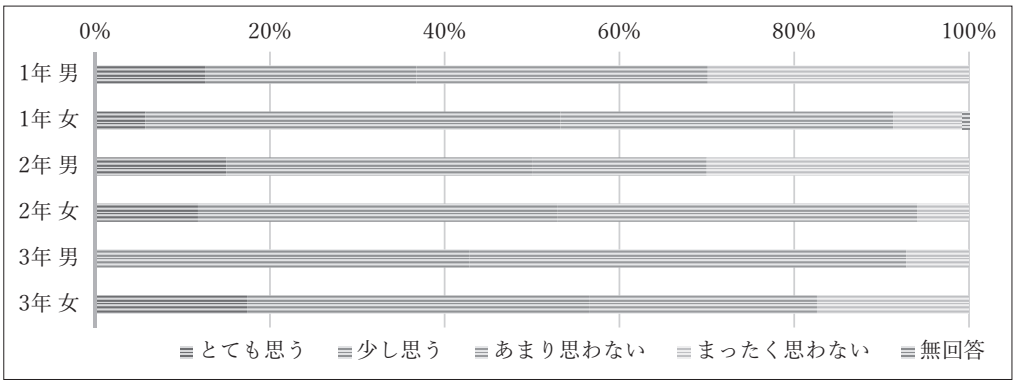

図５．異性や恋愛は面倒なことだと思いますか：学年別

第８回青少年の性行動全国調査では，前回第７回の「分極化」がさらに変化し「不活発化」が表面化している。全体ではあらわれなかった学年による男女の違いはこれからの健康教育で重視されている人権教育の必要性を示唆していると考える。結婚や妊娠・出産に対して「楽しみ」と思えるためには，人権の尊重が人間関係を発展させることを重視し，思いやりと尊厳という見えないものを行動化するセクシャリティ教育が必要と考える。

３．結婚について

１）将来結婚したいと思うか

全体では「早くしたい」は18.6%，「いずれしたい」は50%，「したいと思うがしない思う」7.8%，「したいとは思わない」8.8%，であり２年前の高校生への調査と比較すると結婚を希望する者は減少している。男女別では「早くしたい」「いずれしたい」と合わせると男子は83.8%，女子は72.7%であり「したいと思うがしない」「したいと思わない」を合わせた男子17.0%，女子16.4%と比較すると結婚を希望する割合は男女とも高い。さらに学年別では男子では学年が上がると結婚を希望する者は増加し，女子は「できるだけ早く」は減少し「いずれしたい」が増加している。

学年別にみると，男子は学年が上がると「できるだけ早く」が増加するが，女子は反対に減少し「いずれ結婚したい」が増加している。

２）結婚したいと思う理由と思わない理由

結婚したい理由は男女とも「好きな人と暮らしたい」が75%以上となっている。２年前の調査結果の53.5%と大きく異なっている。

一方で，結婚したいと思わない理由については，男子は「他人と暮らすのが面倒」が１位であり，２位の「責任が重くなるから」は学年が上がると増えている。女子は「自由でなくなる」が１位であり，「他人と暮らすのが面倒」「自由にお金が使えない」が２位となっているがいずれも母数が少ないため参考にとどめる。

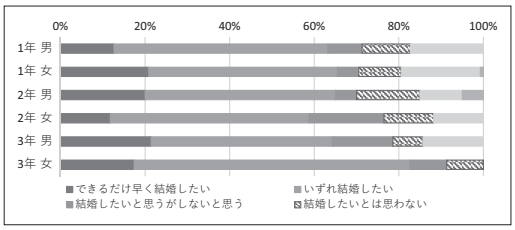

図６．将来結婚したいと思いますか（n＝300）

４．将来の子育てについて

１）子どもを持ちたいと思うか

全学年では「できるだけ早くほしい」と答えた男子は14.9%，女子は12.7%。「いづれはほしい」は男子55.3%，女子56.4%。「ほしい気持ちはあるが持てないと思う」は男子12.8%，女子10.9%。「ほしくない」は男子8.5%，女子14.6%であり男女には有意な差は見られなかったが，学年別では１年生女子が「できるだけ早くほしい」と回答したものが15.8%と男子の9.2

%より多く，２年生の女子が「ほしくない」と回答したものが29.4%と男子の５%よりも有意に多かった。この女子の１年生から２年生への変化は「恋愛が面倒」という割合が高くなることと併せて考えると交際や性的な関わりが現実的になり，単に赤ちゃんがかわいいというだけではなく「自分が子どもを産み育てる」ことに対する回答になっているのではないかと考える。

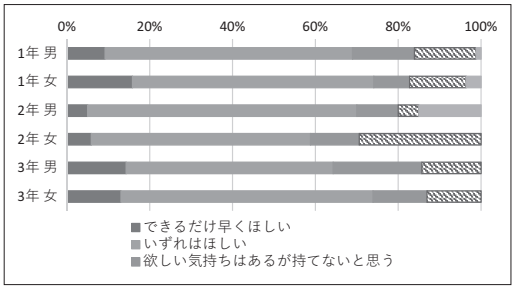

図７．子どもを持ちたいと思いますか(n＝300)

２）子どもが欲しいと思う理由と思わない理由

子どもをできるだけ早くほしい，いずれ持ちたいと答えた者にその理由を聞いたところ，全学年の男女の合計では，「子どもはかわいい」が74%，「家族の絆や幸福感を持てる」が56.3%，「子育てを通して自分が成長できる」が45.1%の順であったが，男女別でも同じ順位であった。これを学年別にみると，男子は３年生で「家族の絆や幸福感を持てる」が77.8%と１位となり，女子は１年生から３年生まで「子どもはかわいい」が１位であり75%以上を占めている。成長とともに社会的な責任感を身に着ける社会的性役割が現れている。　一方子どもは欲しくないと答えた者（n＝12）にその理由を聞いたところ，「手間がかかり負担が大きい」「時間や行動が制限される」が各58.3%と一番多かった。男女別の男子では「社会情勢から子どもの将来が不安」が１位であり女子は全体と同様であった。学年別では１年生の男子，女子共に２位に「子どもは好きではない」と約40%が答えている。他の学年は母数が少ない為参考程度にとどめる。

５．女性の月経について

月経は何歳まであると思うかを聞いたところ，「50歳前後まで」と正答したものは全体で49.3%であった。男女別では男子26.5%，女子64.8%。学年別の男子では１年生27.6%，２年生15.0%，３年生35.7%と３年生でも半数に届かない。女子では１年生68.4%，２年生58.8%，３年生47.8%と男子よりは正答が多いものの，同じく半数以上が正答していない。思春期の第二次性徴については

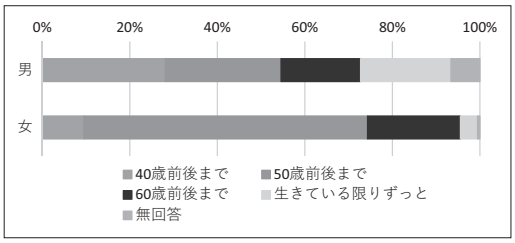

図８．月経は何歳まであると思いますか（n＝300）

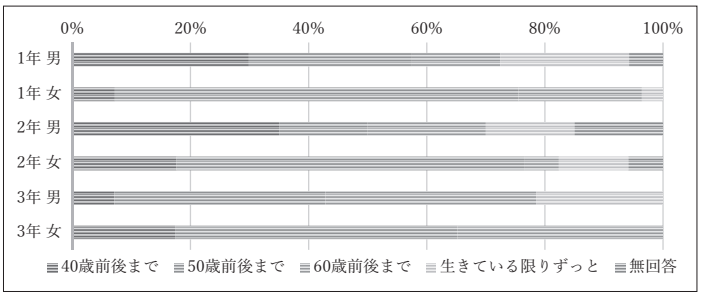

図９．月経は何歳まであると思いますか：学年別（n＝300）

学校教育で扱われるが，それ以降の発達については扱われず，特に更年期の発達については遠い先のこととして興味を持てないことが考えられる。高校生から大学生の知識の変化では大学生の知識が急に高くなることがみられたが，保護者の年齢が更年期となり，特に同性において少し身近な発達としてとらえられていることが考えられた。

6．女性の妊娠について

妊孕力の限界について聞いたところ，「40歳前後まで」と正答したものは全体で32.7%であり「月経がある限り」と誤答したものが37.3%と一番多かった。男女別では男子の正答は27.3%であり42.3%が「月経のある限り」，女子の正答は36.3%であり34.6%が「月経のある限り」と答えた。学年別では１年生と３年生の女子の正答が多いが，そのほかは「月経のある限り」と答えた者が多かった。

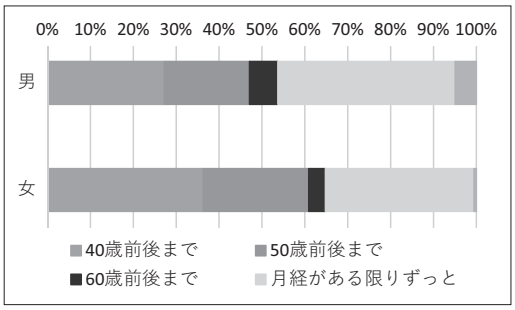

図10．いつまで妊娠できると思いますか（n＝300）

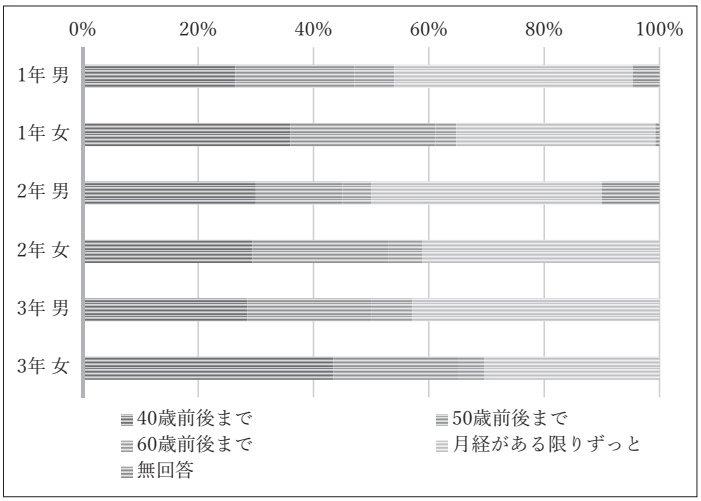

図11．いつまで妊娠できると思いますか：学年別

月経と妊孕力の生理的な仕組みが理解されていないことで同様に認知されていることが考えられる。甲賀[7]は我が国の性やリプロダクションに関する「プレコンセプションケア」の欠如が妊孕性を意識したライフプランの欠如につながっていることを指摘している。つまり，若者の問題行動は若者の未熟さや軽率さではなく，性や性と生殖に関する権利に関して構造的な教育スキルを持たない教育体制の未熟さこそが課題と考えられる。

7．性に関して具体的に知りたい事

性に関する興味について聞いたところ，全体では53.7%が「無い」と答えたが，「男女の心理や行動の違い」が17.7%，「愛とはなにか」が16.0%，「性同一性障害，同性愛」が11.7%の順であった。男女別では男子で「愛とはなにか」19.0%，「男女の心理や行動の違い」15.7%，「性欲」9.9%の順であり女子は「男女の心理や行動の違い」18.4%，「性同一性障害，同性愛」14.5%，「愛とはなにか」14.0%の順であった。学年別でみると「無い」男子では１年生時に

49.4%から３年生時には71.4%と20%以上増加するが，女子は反対に１年生時に56.8%であるものが３年生時には43.5%と減少している。林[8]は「第８回青少年の性行動全国調査報告」の中で2011年から2017年にかけて高校生の女子の性への関心が著しく減少していると述べている。インターネットへのアクセスしやすさが性を日常化させ「関心事」とならなくなったこととの関連が考えられる。

また，３学年の男女に共通して「男女の心理や行動の違い」が３位以内に挙がっており１年生時より３年生時に増加している。筆者が健康教育の依頼を受けるときに学校から求められる講話内容は「望まない妊娠の予防」「性感染症の予防」であるが，高校生は成長の中で性を意識する段階となり他者の心理や行動を理解する過程にあると考える。「ジェンダー」や「性的同意」を理解する基礎として他者の理解や尊重を積み上げる教育が必要であることが表れているのではないだろうか。

片瀬[9]は「第８回青少年の性行動全国調査報告」の中で現代の若者たちが「性」を「楽しくない」と表象し関心を失っていく，と若者の性行動の不活発化を考察しているように，関心事として上位ではなくなっていることは前述の「日常化」した情報から深める必要がないことと結びついているのではないだろうか。また，「男女の心理や行動の違い」を知りたいという欲求は，他者の内面を知りたいという欲求でありインターネットの回答では満たされないことが予測される。

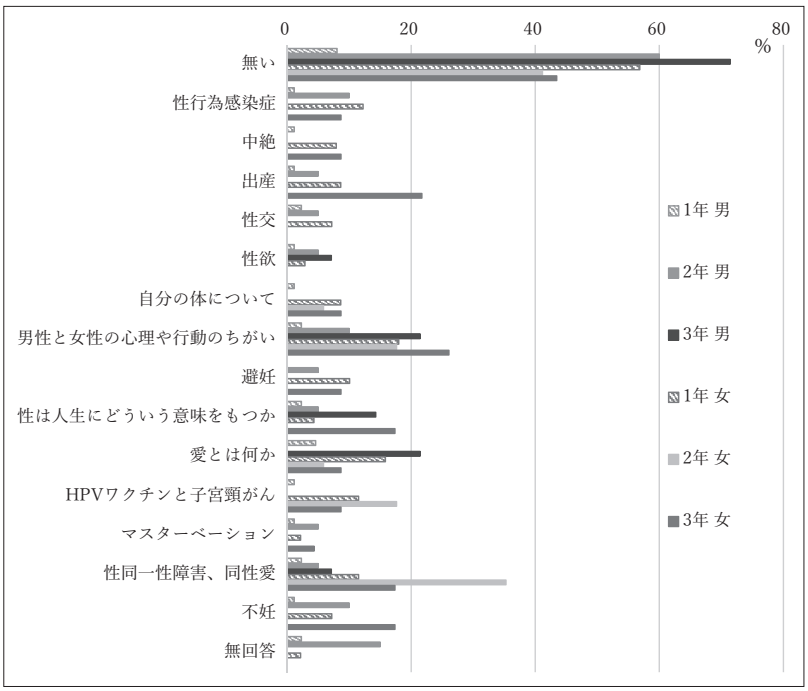

図14．性に関して具体的に知りたいこと：学年別（N＝300）

Ⅴ　まとめ

1．学年による変化と特徴について

1）これまでの男女差の検討では見えなかった学年による変化を検討することで，学年が上がることが正しい知識と相関していないことが分かった。

2）月経や妊娠に関する知識については，学年が上がることで理解がされているということはなく特に「月経は生きている限りずっとある」や「月経がある限り妊娠できる」という回答が男女ともに正答よりも多く，成長発達に関する教育が思春期に偏っていることが原因と考える。こうした現状での健康教育はその集団のヘルスリテラシーを把握したうえで提供する必要がある。

2．今後の健康教育への課題と展望

1）専門職などの外部講師による講話は，年間予定の中で時数を割く余裕が無い為，３学年合同で１回行われることが多い。授業カリキュラムではない特別講師に依頼する場合は，学年毎のヘルスリテラシーを把握したうえで内容を組み立て，毎年積み上げられることが望ましいと考える。

2）現在の学校教育の中ではヘルスリテラシー教育が体系化されておらずどこまで知識がある状況なのかがわかりにくい。今後の性教育は問題行動への対応ではなく日本でも翻訳された「国際セクシャリティガイダンス」に示されているような「包括的性教育」「セクシャリティ教育」を取り入れる教育が望ましいと考える。

3）問題行動への対処や予防の前に，自らの健康をどのように保ち増進させるかを全員　を対象として行うためにはヘルスリテラシーを高めるプレコンセプションケアを基盤とすることが必要と考える。

4）性教育は人権教育が基盤でありジェンダーや性的同意を意識することが将来の自分のライフイメージを明確にすると考え，教育者の健康教育スキルを高めることが必要と考える。

5）プレコンセプションケアの普及には国立成育医療研究センターなどにより男女それぞれに「プレコン・チェックシート」が提供されている。この具体的なチェック項目は狭義の妊娠・出産に限らず，今の自分の，そして将来の自分や家族のために何を始めるとよいのか，何を実行するとよいのかがわかりやすく示されていることから，筆者も養護教諭養成や看護師養成の中で高校卒業後の健康教育として取り入れている。これまで漠然と伝えていた「自分を大切にする」というメッセージが具体的に伝えられると感じており，今後は実施と平行して受講後の効果をまとめることを予定している。

謝辞

本論文の作成にあたり，調査にご協力いただきました高校の生徒のみなさま，ならびに教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

【文献】

1）丸岡里香（2016）．大学生のライフイメージについて－高校生から大学生への変化－，北翔大学教育文化学部研究紀要，創刊号，145－153.

2）丸岡里香（2017）．高校生の月経や妊娠に関する知識とライフイメージについて，北翔大学教育文化学部研究紀要，第 2 号，163－174.

3）茂木輝順（2018）.「性教育バッシング」を超えて－エビデンスに基づく性教育の構築を，人間と教育，100，104－111.

4）永田尭子（2019）日本性教育協会編「若者の生」白書第 8 回青少年の性行動全国調査報告，小学館，101－104

5）土川祥，和多田抄子，立岡弓子（2018）．助産師学生による女子高校生を対象としたプレコンセプショナルヘルス・ケアの概念を取り入れた健康教育（第 2 報），滋賀母性衛生学会誌，17・18，11－16

6）古川洋子，板谷裕美，藤平麻理子，他（2021）．高校生に向けてのプレコンセプションケア実践とその評価，滋賀県立大学人間看護学研究，19，１－９.

7）甲賀かをり（2020）．プレコンセプションケアの啓発に関する取り組み，産科と婦人科 8 号，87，955－961.

8）前掲 4）日本性教育協会編（2019）「若者の生」白書第 8 回青少年の性行動全国調査報告，小学館，19－20.

9）再掲 4）90－94